

マックス・ヴェーバーと「近代文化」

—『倫理』論文は何を問うのか (1)—

三笥 利幸ⁱ

マックス・ヴェーバー『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』には、1904-5年に初版が『社会科学・社会政策アルヒーフ』に発表されてすぐの段階から現在にいたるまで絶えることなく誤解が続いている。その誤解とは、『倫理』はプロテスタンティズムが資本主義の発展をもたらしたことをあきらかにしたというものである。これはしばしばヴェーバー・テーゼと呼ばれる。しかし、このヴェーバー・テーゼをヴェーバーが主張したことはない。これは『倫理』に対してなされたカール・フィッシャーの批判から始まる誤解である。本稿(1)では、『倫理』初版とそれに対してなされたフィッシャーの批判、およびそれへのヴェーバーの反批判を追い、ヴェーバーはこうした見解を「バカげた教条的テーゼ」と呼んで明確に否定したことをあきらかにした。では、ヴェーバーは『倫理』で何を問うたのか。それについては(2)以下であきらかにしていく。

キーワード：ヴェーバー、プロテスタンティズム、資本主義、近代、近代文化、『倫理』論文、誤解

目次

はじめに

1. 『倫理』の問題設定に対する誤解
 - 1-1. 誤解の流布
 - 1-2. 『倫理』初版への誤解、批判、反批判、そして『倫理』改訂 (以上本号)
2. 『倫理』第1章第1節の論理構成
 - 2-1. 信仰と社会層分化への注目
 - 2-2. 経済を原因とする「一般解放説」
 - 2-3. 教育によって得られる精神的特性への注目
 - 2-4. 外的状況から形成される精神的特性——「過補償説」
 - 2-5. 信仰の内的特性についての漠然とした「社会通念」
 - 2-6. 古プロテスタンティズムと資本主義文化の直接的な内的親和関係の探索 (以上第55巻第3号、以下続く)

3. 資本主義の「精神」とルターの職業概念——鍵概念の準備

4. 『倫理』の問題設定とは
おわりに

はじめに

出版不況といわれる昨今にもかかわらず、たとえば、小熊英二の著作は大部であっても売れているし、大きな影響力を持っている。彼の最近著である『日本社会のしくみ——雇用・教育・福祉の歴史社会学』[小熊 2019] は新書本でもあり、また、日本社会の問題にタイムリーに響く内容でもあって、これまた多くの読者を獲得しているようである。本書を手に取りページを繰ってみると、思いもかけないことに、その序章にマックス・ヴェーバーについての言及を見つけた。

i 立命館大学産業社会学部教授

ヴェーバーは、資本を蓄積しようとする行動は、特定の未来観を暗黙のルールとして共有した社会からしか生まれないと考えた。そこから彼は、キリスト教各宗派の未来観を調べ、プロテスタントの一派を信じる社会から資本主義が発生したと主張した。[小熊 2019: 11]

小熊が論じようとする内容とは直接的な関係を持たない、いわば「枕」としてヴェーバーの『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』(以下、『倫理』)が紹介されている。こうした『倫理』の使われ方は何も小熊に限って見られるのではなく、そこかしこで出くわすものである。そして、小熊もそうした『倫理』の使われ方になっているのだが、また、それは『倫理』にかんする典型的な誤解を繰り返すものである。実際のところ、ヴェーバーが、「プロテスタントの一派を信じる社会から資本主義が発生したと主張した」ことは一度もないのだが、禁欲的プロテスタンティズムが(近代)資本主義を生み出したという誤解あるいは俗説は、それこそ『倫理』が世に現れたとき以来、今に至るまで続き、再生産されている。

もちろん、小熊は自身で『倫理』を読んだ上で上記のような紹介をしているのだろうが、ヴェーバーの専門家ではない小熊が、著書の「枕」でヴェーバーに言及する際、そこで見せる解釈は二次文献の影響を少なからず受けているのではないだろうか。つまり、小熊の『倫理』に対する誤解は、ヴェーバー研究書、解説書などに由来するものと思われるのである。

そのヴェーバー研究書に目を向けてみると、これまた出版不況にもかかわらず、ヴェーバー研究の成果はコンスタントに世に送り出されている。単行本に限って、また、便宜的にヴェーバー生誕150年の2014年以降の直近5年程度を見ていくことにすると、私も関わったヴェーバー生誕150周年記念シンポジウムの記録[宇都宮他 2016]、宗教改革500年に際してキリスト教史学会で開催された『倫理』にかんするシンポジウムの記録[キリスト教史学会 2018]

などは、研究(史)上の「節目」の活動についての出版物である。もちろん、そうしたいわば「イベント」に関わる出版だけでなく、小林純の硬派な「講義」[小林 2015]、そしてその続編[小林 2017]をはじめ、もっと専門性の高いものでも、折原浩の長年にわたる『経済と社会』研究の成果の一つ[折原 2014]、野崎敏郎の『職業としての学問』にかんする緻密な研究・翻訳[野崎 2016][野崎訳]、「価値自由」を日本のヴェーバー受容から論じた拙著[三管 2014]などのほか、『倫理』関連では、茨木 2017、岡澤 2018などが現れている。さらに、今年になっても内藤葉子による心情倫理に定位した政治論[内藤 2019]、そして佐藤俊樹のヴェーバーとフォン・クリースの関係に着目した方法論[佐藤 2019a]など、専門研究のレベルでも少なからぬ著作が出版されている¹⁾。

専門研究の成果が順調に現れるだけでなく、ヴェーバーを取り上げる新書や解説書といった類いのものも出版されて続けている。小熊のヴェーバーへの言及も偶然見つけたように、議論の「枕」やある種の権威づけのためにヴェーバーを取り上げている著書や論文などは私の知り得ていないものまで多数あろうし、ヴェーバーに特化したもの、ヴェーバーに重点が置かれるものも少なくない。そして、専門書が次々と現れてはいても、やはり、こうした新書や解説書のほうが広く一般のヴェーバー理解に与える影響が大きい。専門書を読み解こうと思うのは専門研究者がほとんどだろうし、一般読者や学生は、ヴェーバーを直接読もうとして挫折し、専門書も敬遠する。そうなればひとまずは新書、解説書でヴェーバーを知ろうとするのが通常であろう²⁾。ヴェーバー理解を深めるために専門研究の果たす役割が重要であるのは当然のことだが、広くヴェーバーが知られていくという点では、むしろ新書や解説書こそが主たる役割を果たしている。

今年3月に出版された新書に大澤真幸『社会学史』[大澤 2019]がある。600ページを超える新書としては非常に大きなサイズであるにもかかわらず、

小熊の新書に負けずよく売れているようで、2019年8月7日付けの『朝日新聞』にある大澤へのインタビュー記事によれば、すでにこの時点で3万8千部が売れたそうだ。本書では、アリストテレスから始まり現代の社会理論までを見渡す「社会学史」が展開されているが、ヴェーバーの章には80ページほどが割かれており、研究者個人の名前がつけられた章では一番大きなものとなっている。分量だけでなく、本書の序でヴェーバーの「病」——大澤はヴェーバーはうつ病だったと誤認しているが——から仮説を立てて本書を書き出しているところを考えると、大澤はヴェーバーにかなり重要な位置づけをしていると見ていいだろう。

しかし、大澤 2019には問題がきわめて多く、『倫理』も誤解してしまっている。この大澤 2019に対して、佐藤俊樹はいち早く批判を加えた[佐藤 2019b][佐藤 2019c]。佐藤の批判内容をひとつひとつ紹介はしないが、佐藤は大澤 2019には「通常社会学史では考えにくい、初歩的な事実の誤りがいくつかある」[佐藤 2019b: 33]と控えめな言い方をしつつも、そこには誤謬が次々と現れることを指摘している。たしかに大澤 2019は基本的なことすらきちんと調べず、大澤一流の語り口で書かれている。

大澤 2019以外の新書、解説書についても見てみよう。先ほどと同じく2014年以降のものに限定して、ヴェーバーの名前をタイトルに入れているものに、仲正昌樹の『マックス・ウェーバーを読む』[仲正 2014]や、最近では新書よりも少しボリュームの大きな橋本努『解説 ウェーバー 『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』』[橋本 2019]という解説本がある。大澤 2019は社会学史の中にヴェーバーを位置づけたものだったが、これらはヴェーバーに特化した解説を行うものである。

仲正 2014は『倫理』に限らず、『職業としての政治』や『職業としての学問』、『社会科学および社会政策の認識の「客観性」』(以下、『客観性』)などの「主要著作のいくつか」[仲正 2014: 241]を解説している。「あとがき」には、「ウェーバー業界の人た

ちは「うるさい。」[仲正 2014: 240]からだろうか、批判をあらかじめ封じるための予防線のような種々の文言が並ぶ。仲正から「ヴェーバー業界の人たち」はなんと「うるさい」のかといわれても、やはり、仲正もまた『倫理』を誤解してしまっていることは指摘せざるを得ない。

他方、橋本 2019は、序章でヴェーバーの不正確な伝記的介绍をした後、タイトルどおり『倫理』に特化した解説を行おうとするものである。橋本は『倫理』には「よい解説書がない」「指針にすべき良書も少ない」と断じ、『倫理』研究は「意外と手薄」であり「研究の穴」になっているとまで大言して、歴大な蓄積があるヴェーバー研究、『倫理』研究を全部まとめて無意味だといわんばかりの勢いで本書を書き始めている[橋本 2019: 3-4]。しかしながら、橋本 2019もその冒頭から『倫理』の誤解へとまっしぐらに突進する。

これら三書は、ヴェーバーの位置づけや扱い方、あるいは本としてのボリュームが違うとはいえ、共通して『倫理』を取り上げている。そして、どれも『倫理』をひどく誤解し、誤読して、ときに荒唐無稽な説明をしている。まさに新書、解説書は危機的状況なのである。

この危機的状況を、もう少し立ち入って見てみると、各者各様に誤解をしているのではあるが、共通して躓きの石となっている点がある。それはこの三者だけでなくこれまでの『倫理』への誤解の多くにも共通するものであり、その結果、冒頭に引いた小熊の一文にまで受け継がれてしまっている誤解の起点と呼んでいいものである。それは『倫理』の問題設定——『倫理』では何が論じられているのか——である。実は、『倫理』の問題設定については、『倫理』が世に問われてすぐの段階から現在にいたるまで、絶えることなく誤解が続いているのである。

そこで、本稿では大澤、仲正、橋本らの最近出版された著書にある誤解や誤読をその「理念型」として取り出しつつ³⁾、『倫理』の問題設定を明確にしたい。論点はさまざまあり、また、問題設定だけで

なく『倫理』で展開される議論をその結論に至るまですべてあきらかにして、『倫理』を誤解から解くという方法もある。しかし、本稿ではひとまずは、『倫理』の問題設定をあきらかにすることのみをその目的とする⁴⁾。

1. 『倫理』の問題設定

難解で知られる『倫理』であっても、そこには問いがあって、それにたいする結論がある、超一級の学術論文である。『倫理』の問題設定については本稿の最後にあきらかにするが、それに先だって、ここでは『倫理』の結論を見ておきたい。次の一文は、ヴェーバーがきわめて端的に『倫理』の結論を述べているところである。

近代資本主義精神の、それだけでなく、近代文化の本質的構成要素のひとつというべき、職業理念を土台とした合理的な生活態度は、キリスト教的禁欲の精神から生まれたのだ。本論考はこのことを証明しようとしてきたのだ。[MWGI/18: 484-5=大塚訳 363-4]⁵⁾

この結論は『倫理』末尾——最後から2段落目であり、実質的に最終的な議論をする段落——に登場する。ヴェーバーが『倫理』で見据えるのは「近代文化」であること、「キリスト教的禁欲の精神」は、「合理的な生活態度」を生み出したことが、端的に、読み間違いのような明確さで示されている。

この結論は、ヴェーバーの設定した問いから導かれたものである。繰り返すが、『倫理』は超一級の論文であり、設定された問いに間違いなく対応する結論が示されている。ということは、多くの誤解や誤読は、この『倫理』の問いをとらえきれないだけでなく、結論も無視して引き起こされていることになる。結論だけでもしっかり見ておけば、問いについての誤解をただす可能性があったらうが、『倫理』の問題設定への誤解は、ともかく強力で、ヴ

ェーバーの結論すら吹き飛ばしてしまっている。

では、ヴェーバーの示した『倫理』の結論が以上のようなものであることをしっかり確認した上で、大澤 2019、仲正 2019そしてより明示的には橋本 2019にみられる典型的な誤解を見ていくことにしよう。

1-1. 誤解の流布

大澤は『倫理』の問いは何かを直接的に考えているわけではないが、それでも以下から大澤の解釈は十分に読み取れる。

ヴェーバーはたしかに、「信者はどう考える」ということを計算に入れていますが、そこから資本主義の精神が生まれるというのは、完璧に意図せざる結果なのです。……自分はただただ神のために、神の道具として生きていると人びとが思うからこそ、結果的に、意図とは無関係に、むしろ意図に反して、資本主義なるものが実現するわけです。[大澤 2019: 355]

大澤は、「意図せざる結果」にヴェーバーが「社会現象の本質を見ている」[大澤 2019: 355]とした上で、『倫理』ではプロテスタンティズムが資本主義なるものを生み出したという主張が展開されると理解している。これが先の小熊の示す理解に通じるものであることは明瞭であろう。

仲正は、『倫理』では「内面的信仰の問題である「プロテスタンティズム」と、経済的な投資・生産の様式である「資本主義」という一見、何の接点もなさそうな二つの事象を、「世俗内禁欲」というキー概念によって巧みに結び付けた」[仲正 2014: 14]議論がなされているという。また別の箇所では、次のようにも述べている。

神に対する強い信仰が、近代における資本主義発展の原動力になったとする、かなり逆説的な仮説である。[仲正 2014: 29-30]

伸正も大澤と同じく、『倫理』では本来無関係だと思われる宗教領域と経済領域が「意図せざる結果」として結びつくという意外な設定を『倫理』に認め、かつ、両者とも、『倫理』では宗教が資本主義を発展させたことが論じられていると考えている。『倫理』にある仕掛けをどうとらえるかに違いが見られるとはいえ⁶⁾、小熊、大澤それから伸正は同じ理解の地平に在るといえよう。

このような『倫理』の問題設定の理解(誤解)を大澤、伸正以上にはっきりと示しているのが橋本である。橋本 2019の冒頭には、次のようにある。

ヴェーバーは、「プロテスタンティズムと資本主義の発展の関係」を論証したといわれるけれども、それは本当にうまくいっているのだろうか。[橋本 2019: 4]

見られるように、橋本にとって、『倫理』の問題は「プロテスタンティズムと資本主義の発展の関係」にあることが明確に、無批判に前提されている。しかし、橋本自身が書いているとおり、「ヴェーバーは、「プロテスタンティズムと資本主義の発展の関係」を論証したといわれる」のであって、本当にそうなのかどうか、橋本自身が『倫理』にその根拠を求めてはいない。出発点が『倫理』に内在しない、伝聞、仄聞、流説、巷説、俗説であり、それをいっさい検証、吟味することなく事実として橋本は出発する。

いや、橋本によれば、これは俗説ではないようである。「プロテスタンティズムの倫理は、資本主義の発展にとって、どこまで重要な原因だったのか」という問いは「ヴェーバーが『プロ倫』の最初のほうで立てた問題であった」らしい[橋本 2019: 131](傍点は引用者)。これは俗説どころか、ヴェーバー自身が『倫理』で設定した問いだと橋本はいう。しかし、「『プロ倫』の最初のほう」がどこなのか、当該箇所が明示されることはない。

橋本は、『倫理』が「プロテスタンティズムと資本

主義の発展の関係」を「論証した」ものだと信じきって、最後まで橋本 2019を書いている。同じことは大澤 2019にも伸正 2014にもいえる。しかし、残念ながら、「『プロテスタンティズムと資本主義の発展の関係』を論証する」という問題設定は、『倫理』の最初のほうにも最後のほうにもどこにもない。そんな問題設定は、先に見た『倫理』の結論と齟齬をきたすことは明白である。『倫理』は「『プロテスタンティズムと資本主義の発展の関係』を論証した」というのは、まさに誤解であり、俗説の典型である。この種の誤解は、『倫理』初版が出された段階ですでに出現していたものであり、明確に誤りであって、ヴェーバー自身がきっぱり否定している当のものなのである⁷⁾。

1-2. 『倫理』初版への誤解, 批判, 反批判, そして『倫理』改訂

なぜ『倫理』に書かれてもいない俗説をふりかざし、誤解に満ちた問題設定から『倫理』を解説してしまおうとするのか。その原因は様々であろうが、予断を持ってテキストに当たっていること、そしてその予断ゆえに調査や検証を怠ることが災いしていることは容易に推測できる⁸⁾。

まず、『倫理』には初版とそれに大きな修正が加えられた改訂版があるという基本事項から確認しよう。というのも、大澤、伸正そして橋本はこの初版と改訂版の異同に完璧なまでに無頓着であるからだ⁹⁾。

『倫理』には、1904-5年に『社会科学・社会政策アルヒーフ *Archiv für Sozialwissenschaft und Sozialpolitik*』第20巻、第21巻に掲載された初版と、それへの批判、反批判を経て、1920年に大改訂がなされた上で『宗教社会学論集 *Gesammelte Aufsätze zur Religionssoziologie*』第1巻に収められた改訂版が存在する。このことは安藤英治によって先駆的かつ詳細に論じられた¹⁰⁾。また、『マックス・ヴェーバー全集 *Max Weber Gesamtausgabe*』では、『倫理』初版と、それへの批判に応えた反批判論文などがひ

とつにまとめられた巻 [MWGI/9] が2014年に、『倫理』改訂版——初版との異同が確認可能になっている——が収められた巻 [MWGI/18] が2016年に出版されている。訳本にも、初版と改訂版の異同が確認できる梶山力訳・安藤英治編『倫理』[梶山訳・安藤編]が存在している。このように、事実としても、利用できるテキスト群の状況としても、『倫理』研究をする際には初版と改訂版との異同に留意するのが基本中の基本となっている。ところが、大澤はじめ三者は、『倫理』初版に対してなされた批判も、それに対するヴェーバーの反批判も、そしてこれらによってどう『倫理』が改訂されたのかも、まったく顧みることはない。特に橋本の誤解は、『倫理』初版に対するカール・フィッシャーの誤解そのものといっているのだが、そのことに橋本が気づくはずもないわけである。

以下ではフィッシャーの誤解に基づいた『倫理』初版への批判と、それに対するヴェーバーの反批判を見てみよう。

フィッシャーは、『倫理』初版に対する批判を『社会科学・社会政策アルヒーフ』第25巻に寄稿している。そこには次のようである。

信仰と資本主義的發展との間に緊密な関係があることは明白である。ヴェーバー教授の賞賛すべき論文は、その並行現象を新たにかつ精力的に指摘している。[Fischer 1907: 242]

フィッシャーが、ヴェーバーはプロテスタンティズムと資本主義發展との関係を論じたと受け取っていることは明白である。そして、ここに見られるフィッシャーの『倫理』認識と、橋本のそれとはまさに同じものであり、また、大澤、仲正にも見られる、いまだに繰り返される典型的な誤解である。

これに対して、ヴェーバーは反批判論文——同じく『社会科学・社会政策アルヒーフ』第25巻に、フィッシャーに連続するように配置されて掲載された——のなかで、「批判というものは大きな誤解に基

づいてなされることがある——前掲のそれ(フィッシャーの批判——引用者)はそのひとつだと私は思う」[Weber 1907: 243=MWGI/9: 478]と述べ、まず端的にフィッシャーがなした『倫理』への批判が批判たり得ておらず、それは誤解であることを指摘している。

この反批判論文の中には、ヴェーバーが「もう一度しっかり私の論文の〔『社会科学・社会政策アルヒーフ』〕第21巻103, 104ページを参照してほしい」[Weber 1907: 246=MWGI/9: 483]と参照指示をしている一文がある。その箇所は、改訂に際してウェズリーの長い引用が加えられ、もともとひとつだった段落がふたつに分離された箇所 [MWGI/9: 414-6] [MWGI/18: 469-76] である。以下には『倫理』初版から当該箇所を引用しておこう。

ピューリタニズムの人生観の力が及びえたかぎり、この人生観は、いかなる場合でも、市民的で、経済的に合理的な生活態度に向かう傾向——これが単なる資本形成の促進よりもはるかに重要なことはもちろんのことである——に対して有利に作用した。……この強力な宗教運動が経済的發展 wirtschaftliche Entwicklung に対してもった意義は、まず第一に、その禁欲的な教育作用 asketische Erziehungswirkung にあったのだが、それが全面的な経済的作用 ökonomische Wirkung を発揮するのは、通例は純粹に宗教的な熱狂がすでに頂上をとおりすぎ、神の国を求める痙攣 Krampf がしだいに醒めた職業道徳へと解体しはじめ、宗教的根幹が徐々に死滅して ersterben, 功利的現世主義がこれに代わるようになった後でだった。[MWGI/9: 414-6=梶山訳・安藤編: 345-8]

一読してわかるとおり、ヴェーバーは宗教が経済を發展させたなどとはまったく述べていない。すでに紹介した『倫理』の結論と同じく、ヴェーバーはここでもはっきりと禁欲のプロテスタンティズム(ピューリタニズム)が、経済的發展を生み出したので

はなく——「資本形成」に触れながらも、肝心な点はそのにあるのではなく、それよりもはるかに重要なこととして——「市民的で、経済的に合理的な生活態度」をこそ生み出したと述べているのである。また、宗教運動が経済発展に直接作用したのではなく、経済発展に対してもった「意義」として、「第一に」挙げるべきは「禁欲的な教育作用」であると述べていることもしっかり見ておかねばならない。さらにヴェーバーは、禁欲的プロテスタンティズムの宗教運動の直接的な経済的作用が認められるとすれば、それは痙攣を引き起こすほどの宗教的熱狂が冷め、宗教的根幹が死滅したあとだと述べている。宗教的根幹が死滅している以上、もはやそれは宗教ではなくなっているのであって——ヴェーバーは功利的現世主義と書いている——、宗教が経済を生み出す、宗教が経済発展の原因となっているとは読みようがないのである。

上記はすでに『倫理』本文に記していたことであり、ヴェーバーとしては誤解の余地はないと思っていたところである。にもかかわらず、フィッシャーは誤解した。となれば、ヴェーバーとしては、『倫理』の上記の箇所を参照指示するだけでなく、さらに明確にフィッシャーへの反批判をしなければならなかったのだろう。ヴェーバーは反批判論文の先に引用した箇所に続けて、次のように述べる。

信仰への帰依という単なる事実が一定の経済的発展をまったくもって魔法のように生み出す aus dem Boden stampfen ことができるかのような〔あり得ない〕見解——この見解を最終的に私の見解だとして非難しようとする人などまづないだろう〔といえるほどこうした見解を主張していないことはあきらかである〕。[Weber 1907: 24=MWGI/9: 483-4]

上記引用中の亀甲括弧のなかは、意味を取りやすくするために私が補った言葉であるが、「あり得ない」と補ったのは、ここが könnte という接続法Ⅱ式で書かれていることをはっきり示すためである。

また、ヴェーバーは将来『倫理』を別冊版 Separatsgabe で刊行することを模索していた [Weber 1907: 246=MWGI/9: 485] が、フィッシャーの誤解を受けて、その際には以下のような改訂を行うという方針を示した。

経済的諸形態を宗教的動機から導出する Ableitung といったことを私は主張していないのだが、そうした意味に誤解されるようなことが万が一にでもあるような言い回しがあれば、それは取り除くつもりである [Weber 1907: 246=MWGI/9: 485]

この引用で「万が一にでもあるような」と訳したのは、先と同じくヴェーバーが könnte という接続法Ⅱ式を使っているからである。要するに、改訂方針を示すという体裁をとりつつ、実は、そんな改訂が必要な箇所はない、つまり、誤解の余地はなく、宗教が経済発展を生み出すなどと述べている箇所は皆無だとヴェーバーは断言しているのである。

以上引用した、接続法Ⅱ式が使われたふたつの箇所¹¹⁾から、ヴェーバーは宗教が経済発展を生み出すという見解を完全に否定していることは明白である。

以上でもう十分かもしれないが、さらに見ておこう。ヴェーバーは以下のようにだめを押している。『倫理』改訂版から引用する。

……「資本主義精神」(もちろんここで暫定的に使用するような意味で)は宗教改革の一定の影響の結果としてのみ発生し得たとか、あるいはよもや、経済システムとしての資本主義は宗教改革の産物だなどというようなバカげた教条的テーゼ töricht-doktrinäre These を、決して主張してはいけない [MWGI/18: 255-6=大塚訳: 135]

引用中、「経済システムとしての資本主義は宗教改革の産物だなどというような」の部分は改訂に際して加筆されたものである¹²⁾。また、この加筆箇所

にさらに注も加えている。

ここも、またこのあとも、まったく変更しないままにしておいたのは、私としては十分明瞭に述べていると思っているからだが、それにもかかわらず、奇妙なことにいまだに私にこの見解がなすりつけられるのである。[MWGI/18: 255-6=大塚訳: 136]

先に見た、フィッシャーへの反批判論文のなかに示された「改訂」方針どおり、宗教が経済的發展を生み出すといった主張をしているような箇所はいいないからこそ、『倫理』を改訂するにあたって、ヴェーバーはその叙述を「まったく変更しないままにしておいた」のである。「バカげた」見解と呼ぶべき誤解に対する、ヴェーバーのいらだちがよくわかる注である。

このようにフィッシャーとのやりとりだけを見ても、『倫理』の問題の所在が「『プロテスタンティズムと資本主義の發展の關係』にはないということはいきらかである¹³⁾。

さて、では『倫理』では何が問われたのか、その問題設定については節をあらため、『倫理』第1章の論理構造に立ち入っていきらかにしていきたい。

(以下続く)

凡例

ヴェーバーからの引用は、『マックス・ヴェーバー全集』*Max Weber Gesamtausgabe*を底本とする。略号は『全集』とし、参照ページを記載する際の略号としてMWGを使い、そのあとにAbteilungをローマ数字で、Bandを算用数字で示す。

『マックス・ヴェーバー全集』*Max Weber Gesamtausgabe, Tübingen : J.C.B. Mohr (Paul Siebeck)*

MWGI/9: *Asketischer Protestantismus und Kapitalismus, Schriften und Reden 1904-1911, herausgegeben von Wolfgang Schluchter in*

Zusammenarbeit mit Ursula Bube, 2014 [— Die protestantische Ethik und „Geist“ des Kapitalismus = 1994 梶山力訳・安藤英治編『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の《精神》』未來社、『倫理』初版と略記、また、訳本については梶山訳・安藤編と表記、— Kritische Bemerkungen zu den vorstehenden „Kritischen Beiträgen.“]

MWGI/17: *Wissenschaft als Beruf 1917/1919, Politik als Beruf 1919, herausgegeben von Wolfgang J. Mommsen und Wolfgang Schluchter in Zusammenarbeit mit Birgitt Morgenbrod, 1992 [— Wissenschaft als Beruf = 2016 野崎敏郎訳『職業としての学問 (圧縮版)』見洋書房、学問と略記、また訳本については野崎訳と表記]*

MWGI/18: *Die protestantische Ethik und der Geist des Kapitalismus, Die protestantischen Sekten und der Geist des Kapitalismus, Schriften 1904-1920, herausgegeben von Wolfgang Schluchter in Zusammenarbeit mit Ursula Bube, 2016 [— 1989 大塚久雄訳『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』岩波書店、『倫理』初版との差異を示す際には『倫理』改訂版と略記、また、訳本については大塚訳と表記]*

MWGI/21: *Das antike Judentum, Schriften und Reden 1911-1920, herausgegeben von Eckart Otto unter Mitwirkung von Julia Offermann, 2005 [— 2004 内田芳明訳『古代ユダヤ教 (上) (中) (下)』岩波書店、訳本については内田訳と表記]*

注

- 1) このほか、野口雅弘による『職業としての学問』と『職業としての政治』の翻訳(野口雅弘訳『仕事としての学問 仕事としての政治』講談社、2018年)、さらに直近では戸田聡による『宗教社会学論集』第1巻前半部分の翻訳(戸田聡訳『宗教社会学論集 第1巻 上』北海道大学出版会、2019年)など、翻訳についても新たなものが続いて出版されている。
- 2) もちろん、手軽にインターネット検索を行い、ネット上の「解説」を読んでヴェーバーを理解しようとする向きも少なくない。いや、むしろ実数としてはこちらのほうが圧倒的に多いだろう。こ

のネット上の「解説」とやらが、これまたとんでもない誤解を、これまで以上に強力で再生産していることは承知している。しかし、本稿ではこうしたネット上の言説にまでは踏み込まない。というのも、こうしたネット上の言説は、これまでの典型的な誤解の焼き直しの域を出るものではないからである。

- 3) 私が本稿でヴェーバーに関連する新書、解説書について直近5年程度——ヴェーバー生誕150年以降——を検討対象としたのは、あくまでも便宜的にであって、それ自体に深い意味はない。もっと遡れば検討対象とすべきものはいくつもあろう。たとえば、大塚久雄のヴェーバーとマルクスを扱ったふたつの新書 [大塚 1966] [大塚 1977] はいまでも新本で売られており、影響力を持ち続けている。最近では書店に並ぶことはなくなったようだが、日本の敗戦後それほど間を置かずに出版された青山秀夫の新書 [青山 1951] もある。そう考えれば、10年、20年どころか50年、いやもっと前まで検討対象にするということもあり得る。しかし、『倫理』にまつわる誤解、誤読を網羅的に拾い上げることが本稿の目的ではないし、そうすることが『倫理』の理解を深めるとも思えない(『倫理』が戦前から戦後に至るまで、誤解を含めてどう読まれ、どう利用されてきたのかについて、私はすでに検討したことがある [三笠 2008])。本稿の目的は『倫理』の問題設定を明確化するということであり、その目的のためには、『倫理』の誤解、誤読の「理念型」が構成できれば十分であると判断し、最近著のみを取り上げることにした。逆にいえば、大澤 2019、仲正 2014、橋本 2019、はぜひとも検討すべき、検討に値する著書であるという判断をしたわけではなく、また、これらだけに向けて論評を加えようという意図もない(そうであるなら書評を書くことが一つの手段として考えられるが、そもそもこれらを書評する気はない)。繰り返すが、これらはあくまでも便宜的、形式的、臨機的に選出したものであり、これらを見ることで、長らく続くヴェーバーへのあるいは『倫理』への誤解、誤読を「理念型」として取り出せると判断しただけである。それゆえ、これらについて個別の点で指摘しておくべきものは、極力

本文ではなく注にしている。

- 4) 大澤 2019や仲正 2014には、ヴェーバーにかんする——大澤の場合は取り上げているすべての論者や議論についての——参考文献はいっさい挙げられていない。橋本は『倫理』研究は「研究の穴」となっていて、「少し調べてみれば分かるのだけれども、『プロ倫』の全体について研究しているヴェーバー学者というのは、日本に一人もいない」 [橋本 2019: 4] (傍点は引用者)と——きわめて非論理的に——断じるのだから、参考にするべき著書や論文を挙げないのが当然なのだろう。大塚久雄や山之内靖 [山之内 1993] の研究も、牧野 2011や折原 2005、安藤編 1977も不十分だと切り捨てる [橋本 2019: 301]。

しかし、安藤英治の先駆的業績 [安藤 1992] や折原浩の研究 [折原 1977] [折原 2005] などは、『倫理』の論理構造を丹念にあきらかにした重厚な研究であり、『倫理』に対する誤解をいかにして解くことができるのかと腐心した労作である。また、牧野も『倫理』の問題設定に関する誤解を封じ得る、短くかつ適切な指摘をしている [牧野 2011: 3]。研究論文でも、たとえば荒川敏彦は『倫理』への誤解を手際よく指摘し、「『倫理』論文をどう読んではいけないか」を示している [荒川 2017: 5-6]。大澤たちが『倫理』を誤解せずにする方途は、「少し調べてみれば分かる」はずなのである。

こうした研究状況に鑑み、本稿では『倫理』の論理構造をすべてにわたって検討するという大きな課題に取り組む前に、その問題設定をしっかりと見きわめることで、先行研究とともに『倫理』を誤解から解くという道を選んだ。

- 5) 引用中の、「近代資本主義精神」は、初版では「資本主義精神」であった [MWGI/9: 420 = MWGI/18: 484 = 梶山訳・安藤編 355]。
- 6) 『倫理』には「意図せざる結果」というトリッキーな仕掛けがあるという線で理解する大澤と仲正に対して、小熊はむしろストレートに宗教から資本主義が生まれると論じ、橋本にいたっては「意図せざる結果」という論理立てを否定している [橋本 2019: 247-51]。
- 7) 以上、『倫理』の誤解について論じてきたが、か

くいう私も、実はこうした誤解の流布に加担してしまっただけかもしれない。改版の際に書き直すチャンスがありながら、これまで放置してしまっただけとも含め、自己批判として記しておきたい。

私は以前、社会学初学者向けの教科書で、『倫理』を以下のように解説した。

そこでは、カルヴィニズムをはじめとした禁欲的プロテスタンティズムの陶冶した方法的な生活態度が、やがて近代資本主義を成立させるというプロセスが描かれました。貧欲にお金を儲けようとする態度ではなく、プロテスタンティズムの倫理に支えられた禁欲的生活態度こそが、生活を徹底して方法化・合理化し、やがてそれが経営や労働の合理化をもたらした、近代資本主義を生み出すのに適格的であったことが明らかにされます。[三管 2006: 206]

初学者が一読して、禁欲的プロテスタンティズムという宗教が資本主義を生み出したという誤解に向かわずに済んでいるだろうか。すでに本文で指摘したように、禁欲的プロテスタンティズムは「方法的な生活態度」「合理的な生活態度」を生み出した。この「方法的な生活態度」が宗教的熱狂が冷めた後の時代——上の引用の「やがて」という言葉に込めた意味だが——、近代資本主義という「強力なコスモス」を「つくりあげるのに手を貸した」と述べたつもりだった [MWGI/18: 486 = 大塚訳: 365]。しかし、この書き方では、『倫理』は禁欲的プロテスタンティズムが近代資本主義を生み出したという誤解に読者を導く可能性が十分にある。教科書であることを意識して、『倫理』の世界に入りやすく、平易で正確、さらに厳格に字数制限を守ることを企図して、禁欲的プロテスタンティズムが生み出したものはあくまでも「方法的な生活態度」「禁欲的生活態度」であること、そして、それが「やがて近代資本主義を成立させる」とか、「近代資本主義を生み出すのに適格的であった」といった具合に表記し、最小限の字数で誤解を避けて『倫理』を理解可能にしたつもりだった。しかし、このもくろみは失敗しているのではないかと危惧する。次回の改版の際にはより適切

な表現に変更したい。

- 8) 大澤 2019は、他の彼の著作と同様に、まず先に自分の議論の枠組みがあり、そこに牽強附会にヴェーバーを当てはめていくものになっている。さらに、『倫理』はもちろん、たとえば「価値自由」についても、事実無視、テキスト無視の大澤オリジナルの議論が並ぶ。

大澤は「『客観性論文』(『客観性』——引用者)の中で、ヴェーバーは二つの重要な概念を提出しました」と述べ、その二つの概念のうちの「一つは「価値自由(独 Wertfreiheit, 英 value freedom)」という概念」だという [大澤 2019: 297]。わざわざ原語まで補っているが、これはまさしく事実と反することである。「客観性」に「価値自由」という概念は現れない。さらに大澤は「価値自由」を次のように説明する。

まず「価値自由」とはどういうことか。事実判断を価値判断から区別しなさいということです。……社会学がかかわるのは、基本は事実判断なのです。価値判断ではない。だから、価値自由というのは、「価値から自由である」ということです。……価値自由は、ごくふつうの公準です。……ジンメルについて論じたときに、ヴェンダースの映画に言及しました。ジンメルは都市生活の傍観者のようなものであり、それは、『ベルリン・天使の詩』の天使に喩えられる、と。天使は、外から人間を観察して、人間たちが何をやっているか、それぞれの個人の心の中で何が起きているのかを、ひたすら記述することができる。価値自由というのは、いわば、天使のようにやれ、という命令です。あなたは傍観者として、ひたすら人間の社会を観察するのだ、と。[大澤 2019: 297-8]

ヴェーバーの『客観性』や『社会学・経済学における「価値自由」の意味』(以下、『価値自由』)をきちんと検討した痕跡もなく、これまでのヴェーバー研究すら顧みない、なんと単純で平板な「価値自由」である。こんな「価値自由」なら、ヴェーバーは『客観性』も『価値自由』も書かなかったであろうに。ここに示されるのはヴェーバーの

名を語りつつ、その実、大澤の議論に必要な限りの、大澤オリジナルの「客観性」や「価値自由」である。なお「客観性」や「価値自由」については、三笥 2014および三笥 2019を参照。

仲正も自身の思い込みのために、『倫理』の問題設定を大きくとらえ損なっている。仲正は、ヴェーバーが『倫理』の冒頭第1段落でカトリックとプロテスタントを比較している箇所について、次のように述べている。

カトリックとプロテスタントでは、教義や教会での儀礼が異なるので、信者のライフスタイルも異なってくるのは当然だが、ヴェーバーはそれが経済生活に対する態度の違いを生み出し、プロテスタントの方が資本主義と親和性があるのではないかという仮説を提示しているわけである。一般的に、古い儀礼や教義、教会組織を重視するカトリックよりも、そうしたものを否定するところから出発したプロテスタントの方が、自由な経済活動を許容しやすいというのは、ヴェーバーに指摘されるまでもなく、十分に想像できることである。[仲正 2014: 24-5]

仲正はカトリックよりもプロテスタントのほうがより多く儀礼、教義、組織を否定していると思っ込んでいる。カトリックに比べてプロテスタントにはそうした煩わしい縛りが少なく、「自由な経済活動を許容しやすい」ということは、「ヴェーバーに指摘されるまでもなく、十分に想像できることである」そうだ。しかし、ヴェーバーはこんなことは指摘していない。むしろその逆だ。

ヴェーバーは、たしかに「経済上の伝統主義から脱却していた」プロテスタントたちの立場が、「宗教上の伝統にも懷疑を持ち、あらゆる伝統的権威への反抗を容易にさせた一要因であったと考えることはできる」としながらも [MWGI/18: 129=大塚訳 17]、次の点に留意しなければならないという。

それはほかでもなく、宗教改革が生活に対する教会の支配を排除したのではなくて、むしろ、従来の形式とは別の形式による支配に置き換え

ただけだということである。たしかに、従来の形態による宗教の支配は、最も楽な、当時実質的にはほぼ気付かれなほどの、多くの場合はほとんど形式に過ぎないものだったが、それが、考えられるかぎり最高度に、家庭生活と公的生活の全体において全生活態度をこの上もなくやっかいで真剣に規制するものへと置き換えられたのである。[MWGI/18: 129=大塚訳 17-8]

仲正の考えていることとは正反対で、カトリックの支配には経済的に発達した地域の人びとは、15世紀であれ今日であれ、困難を感じてないのだが、プロテスタンティズムは、16-7世紀の人びとにとっても今日のわれわれにとっても耐えがたいものと感じられるほどの支配なのである [MWGI/18: 129=大塚訳 18]。

経済的に発展した諸地方で宗教改革者たちが熱心に非難したのは、生活への教会-宗教的支配が多すぎるということではなく、むしろそれが少なすぎるということだった。[MWGI/18: 129-30=大塚訳: 18]

見られるように、宗教改革では教会の支配が少ないことが批判されたのであり、プロテスタントたちは、自由になるどころか、むしろより強い支配を選んだのである。仲正は「ヴェーバーに指摘されるまでもなく」、プロテスタンティズムが自由な経済活動を許す程度のことはわかるのだと啖呵を切っているが、『倫理』に根拠を持たず、自身の思い込みから予断を持って議論を始めてしまっている様子が端的にうかがえる。なお、以上のカトリックとプロテスタンティズムとの対比については後でまた触れられる。

- 9) 仲正および橋本は、『倫理』に初版と改訂版が存在する経緯だけは紹介している [仲正 2014: 22] [橋本 2019: 17]。ただし、その異同についてはいっさい言及がない。新書であってもたとえば牧野 2011はきちんと改訂に立ち入った記述をしているし、新書というサイズや性格の制限ゆえに、改訂問題に触れられないということはない。

「改訂」ということでついでに指摘しておけば、

橋本はゾンバルト『近代資本主義』についてもそれが改訂されていることに意識を向けず、誤った議論を展開している。

橋本は「資本主義の精神」という言葉は、ヴェーバーと同時代のゾンバルトが先に用いた用語であった」[橋本 2019: 47] と、ゾンバルトに言及するが、この引用中の「資本主義の精神」という箇所には橋本が付けた注は以下のようなものである。

一九〇二年刊。邦訳は、ゾンバルト『近世資本主義第一巻第二冊』岡崎次郎訳、生活社、一九四三年、一四～一七頁、参照。[橋本 2019: 303]

なぜ原著題名を書かずにいきなり出版年だけが書かれるのか不明だが、ここで橋本が参照指示しているのは『近代資本主義 *Der moderne Kapitalismus*』[Sombart 1902] である。その初版(第1巻および第2巻)は1902年に出版されたが、のちに改訂されて1916年に第2版[Sombart 1916]が出された(さらに、1927年には第3巻[Sombart 1927]も出版されており、それは梶山力によって『高度資本主義 I』というタイトルで部分訳されている)。この改訂版には、「改訂」というレベルを超えた修正がなされており、ゾンバルト自身の言葉で言えば「外見上、まったく新しい著作である」[Sombart 1916: XI] というべきものになっている。このことについては、すでに田村信一が丁寧で紹介し、かつ、『近代資本主義』初版の意義を論じている[田村 1996][田村 1997]。

以上の経緯から、ヴェーバーが『倫理』初版つまり1904-5年段階で利用したのは『近代資本主義』初版であることはいうまでもない。そして、ヴェーバーが『倫理』を改訂する際には『近代資本主義』の改訂版を利用することもできたのだが、『倫理』改訂版でもヴェーバーが参照指示したのは『近代資本主義』初版のままなのである。たとえば、ヴェーバーは『倫理』のある注のなかで『近代資本主義』に言及した際、初版ではこのタイトルのみを記していたが、改訂にあたってそのタイトルの直後に「初版 1.Aufl.」と加筆している[MWGI/18: 462=大塚訳: 341]。意識的に初版を参照していることは、あきらかである。

橋本はこの事実を完全に無視し、1916年の改訂版の訳である岡崎訳に基づいて解説をしてしまった[橋本 2019: 47-8]。この解説がまったく見当違いになることは多言を要すまい。ちなみに、『近代資本主義』改訂の事実、橋本の参照した岡崎訳の訳者による「はしがき」にもしっかり紹介されている。橋本の調査や検証には杜撰なところが多々あるのだが、その一端が見えるところである。

- 10) 安藤の『倫理』改訂問題への執念とでもいうべき取り組みは、安藤 1992および『倫理』をはじめ日本語訳した梶山力訳の復活[梶山訳・安藤編]に集約されている。
- 11) ヴェーバーが接続法によって記した文は、おおいに注意して読む必要があることは、野崎によって強調されたことである[野崎 2016: 362-70]。こうした文法事項の理解不足が、誤解の温床になっていることは野崎 2016の随所で指摘されている。のちに触れるが、橋本は接続法Ⅱ式を無視したために、「資本主義の精神」についてあらぬ議論を展開している。
- 12) この加筆は、たとえば、フィッシャーへの反批判中に次のように記していたところが反映されていると考えられる。

私はただ、宗教改革だけが資本主義精神を、「あるいはよもや」(経済システムとしての)資本主義それ自体を生み出したというような「バカげた」命題 die „törichte“ These の可能性を強く否定した(『アルヒーフ』第20巻54ページ)が、それは資本主義的経営の重要な形態はそれ(宗教改革——引用者)よりずっと古くから存在するからである。[Weber 1907: 244=MWGI/9: 479]

- 13) 『倫理』の問題設定を誤解しているにとどまらず、特に大澤や橋本には、誤解を通り越えた牽強付会な議論が目立つ。大澤の展開する牽強付会の説については、すでに佐藤 2019b および佐藤 2019c で批判がなされているのでとりあえずそれにかかせるとして、ここでは橋本 2019についてのみ指摘をしておきたい。橋本 2019にはさまざ

まなレベル、さまざまな点で問題があるが、ここでは橋本の表現にまつわる問題をほんの少しだけ示すことにする。

まず、橋本 2019 には、その内容以前に日本語表現に問題がある。たとえば、「『プロ倫』の改訂を含めて、『宗教社会学論集』の執筆に専念するとともに、『経済と社会』の草稿も一定の完成段階にいたるまで執筆した。」[橋本 2019: 10] (傍点は引用者) などはその典型である。日本語表現の奇妙なところ、不正確なところ、意味不明なところ、論理飛躍、論理破綻が多すぎる。

この日本語表現の問題の延長線上にある問題であり、より深刻な問題として現れるのが、概念の定義や使用のあり方である。

橋本は概念の定義を行うにあたり、『倫理』やその他のヴェーバーのテキストを無視したり、あるいは強引に解釈したり、また、根拠を示さないうままであったり、ということがしばしばである。さらにその定義に一貫性がなく、破綻や自己撞着をおこしていることもある(他方で、「よい社会」「よく生きる」「精神性」「ヴェーバー主義者」「啓蒙人」など、定義をせず何を指しているか不明なまま放置される橋本オリジナルの概念もある)。

たとえば、橋本は「『理念型』と呼ばれる方法」[橋本 2019: 101] (傍点は引用者) を簡単に説明するとして、ヴェーバーの名を挙げながら、その実、ヴェーバーとは無縁の議論を続けた挙げ句、次のようにいう。

「理念型」とはこのように、ある観点からその文化的意義を判断するという目的に即して、概念を構成していく方法である。理念型は、ある概念の純粋なイメージである。そのイメージは、いくつかの特徴から成り立っている。理念型は、それらの特徴を、ひとつの統一的なイメージにまとめたものである。[橋本 2019: 103]

引用の一文目で橋本は、「理念型とは」と書き出して、「……概念を構成していく方法である」と縮めている。「理念型」は「方法」ということらしい。しかし、次の文では「理念型は、ある概念の純粋なイメージである」と述べ、「理念型」は「方

法」ではなく「イメージ」となっている。いや、そもそも、「ある概念の純粋なイメージ」という日本語表現自体、意味不明である。この意味をわからうとさらに次の文を読んでも、理解不能の表現が出てくる。「イメージ」には「特徴がある」「特徴が認められる」のであればまだなんとか理解できても、「イメージ」が「特徴から成り立っている」では読者はますます意味の迷宮へと引きずり込まれるだろう。最終的に、「特徴」が「統一的なイメージにまとめ」られたものが「理念型」といわれるが、もはや迷宮からは逃れようもない。橋本のいうとおり、「理念型」を正しく理解することは「『プロ倫』を読む際のカギになる」[橋本 2019: 102] のだが、これでは正しく理解する以前に意味不明である。

『倫理』の具体的な叙述にかかわる諸概念についても、同様の問題がある。橋本の牽強附会であり、だからこそ自己撞着を起こしてしまう定義と、その議論の進め方を示す一例を挙げよう。

橋本はフランクリンに言及する際に、「エートス」を「『持続的な情熱』のこと」あるいは「ある一定の時間を通じて持続する情熱」と定義する[橋本 2019: 57]。「エートス」は『倫理』改訂に際して加筆されたこと、あるいは「倫理」と書かれていたところを「エートス」と改めたことに触れることはない。橋本は「持続的な情熱」をかぎ括弧に入れて表記しているから、一見『倫理』本文にそうした定義がなされているように思われるかもしれないが、そんな定義は『倫理』にはいっさいない。橋本はさらに「情熱」に「パッション」とルビまで振るが、ヴェーバーはそもそも Passion という語をほとんど使わない。ヴェーバーの主要著作が収められた CD-ROM である Max Weber im Kontext で、Passion だけでなく Passion の合成語まで含めて検索しても、使用されているのは『古代ユダヤ教』の注のなかの、それも「情熱」ではなく「苦難」という意味で使われる Passion の 1 箇所のみである [MWGI/22: 748 = 内田訳: 896]。つまり、橋本のいう意味で Passion をヴェーバーが使うことは主要著作で一度もないのである。それでも橋本は、ヴェーバーの用法に従うことなく、「情熱」というのはしばしば、一時的に燃え上がった

ては消えてしまう」ものだが、スポーツ選手が試合で勝つべく練習に打ち込むように「人間の心の深いところで持続し、その人の人生を突き動かす駆動因になることがある」が、それが「エートス」なのだという〔橋本 2019: 57〕。要するに、橋本は『倫理』ではなく、橋本の理想とする特別の能力を発揮する人物——橋本の理想とするフランクリン——にあわせて「エートス」概念を定義しているようである。

もちろん、こうした「エートス」の定義は失当なのだが、それについてここで「エートス」とは何かという議論をしなくても、「エートス」概念は「伝統主義」についても使われているという一事実〔MWGI/18: 188-9=大塚訳: 76〕を見るだけで、橋本の「エートス」の定義が破綻をきたしていることは明白である。

挙げていけばきりがなくなるので、もう一つだけでやめることにする。『倫理』で重要な概念の一つである「脱呪術化」について見ておこう。というのも、橋本は「脱呪術化」を最終的に真逆の方向に解釈してしまう——それは彼の「エートス」理解とも通底する解釈である——からである。橋本は次のように述べる。

このように、宗教的な儀礼にはいっさい頼らずに、日常生活を徹底的に合理化して生きることが魂の救済につながるとみなす態度を、ウェーバーは「脱呪術化（脱魔術化、呪術からの解放）Entzauberung」と呼んでいる。ここで「脱呪術化」とは、「脱宗教化」と同じではない。脱呪術化には、「宗教を徹底的に合理化して、魂の救済のために最も合理的な行為をする」という意味がある。「脱呪術化」とは、救済の徹底的な合理化である。〔橋本 2019: 152〕

まず「脱呪術化」は「日常生活を徹底的に合理化」するという説明から始まり、すぐにそれが「宗教を徹底的に合理化」することになり、さらに「救済の徹底的な合理化」となる。先の「理念型」と同様、「脱呪術化」の定義の当否以前に、わずか4文のあいだで定義がどんどん変わり、結局、橋本の「脱呪術化」の説明は意味不明になっている。

これが『倫理』に根拠のある説明でないことはいうまでもない。

「脱呪術化」についても詳論はせず、フリードリヒ・テンブルックの論文〔Tenbruck 1975=1997〕をはじめとする先行研究やこの概念にまつわる議論についても、紹介を省きたい（安藤の考察〔安藤 1992: 299-306〕や荒川 2002などを参照）。それでも、「脱呪術化」は——「エートス」と同じく——『倫理』初版には存在せず、改訂版で登場すること、そしてそれは4箇所〔MWGI/18: 280, 320, 398, 403〕で使用されていることくらいはおさえておこう。その上で、『倫理』に現れる「脱呪術化」を見ていけば、それは、まさに呪力を認めなくなること、つまり、人間や聖礼典といった被造物から神を動かしかいを得るような呪力、魔術を剝奪、廃棄していくこと——「神強制 Gotteszwang」の否定——であると理解できる。特にカルヴィニズムや洗礼主義には被造物神格化の拒否が強くみられるように、脱呪術化が徹底されており——だからこそ、「脱呪術化」の加筆はカルヴィニズムや洗礼主義の箇所に集中しているわけである——、これらほどの徹底性はなくとも、他の禁欲的プロテスタンティズム諸派についても共通して脱呪術化が認められる。「脱呪術化」は、端的にいえば、神こそが全能であり力を持つものであって、人間や被造物には力を認めないということなのだが、橋本はどうしても神より人間に力を認めたいらしく、信徒たちが職業労働に励むことを、「自分の能力を高めていく」〔橋本 2019: 84〕、「互いに高め合う」〔橋本 2019: 180〕、「みずからの精神性を高めていく」〔橋本 2019: 264〕ことだとして、それは自分（人間）という被造物の能力を高めるためであるという話へスライドしていく。最終的に橋本は次のように述べる。

禁欲的なプロテスタントにとって、大切なことは、貨幣欲にはとらわれずに、勤勉に働いて、自分の魂を救済することである。〔橋本 2019: 273〕

見られるように、プロテスタントたちは自力救済するというものになっている。「脱呪術化」どこ

ろか、橋本によれば人間が自ら救済の呪力を獲得してしまうのである。『倫理』についての多くの誤解や誤読があるが、「脱呪術化」についてここまでの曲解へ至る議論を私は知らない。

文献

- 青山秀夫 1951 『マックス・ウェーバー—基督教的ヒューマニズムと現代』岩波書店
- 荒川敏彦 2002 「脱魔術化と再魔術化」『社会思想史研究』No.26.
- 荒川敏彦 2017 「マックス・ヴェーバーの宗教社会学における宗教と経済——著作間の相互連関を問う」『宗教研究』第91巻第2号
- 安藤英治編 1977 『ウェーバー プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』有斐閣
- 安藤英治 1992 『ウェーバー歴史社会学の出入——歴史認識と価値意識——』未来社
- 茨木竹二 2017 『「倫理」論文解釈の倫理問題——特に「マックス・ヴェーバーの犯罪」における“不正行為”をめぐる』時潮社
- 宇都宮京子他編 2016 『マックス・ヴェーバー研究の現在——資本主義・民主主義・福祉国家の変容の中で』創文社
- 大澤真幸 2019 『社会学史』講談社
- 大塚久雄 1966 『社会学の方法——ヴェーバーとマルクス』岩波書店
- 大塚久雄 1977 『社会学における人間』岩波書店
- 岡澤憲一郎 2018 『ウェーバーの宗教観——宗教と経済エートス』御茶の水書房
- 小熊英二 2019 『日本社会のしくみ——雇用・教育・福祉の歴史社会学』講談社
- 折原浩 1977 『デュルケムとウェーバー 上』三一書房
- 折原浩 2005 『ヴェーバー学の未来——「倫理」論文の読解から歴史・社会学の方法会得へ』未来社
- 折原浩 2014 『日独ヴェーバー論争——「経済と社会」(旧稿)全篇の読解による比較歴史社会学の再構築に向けて』未来社
- キリスト教史学会編 2018 『マックス・ヴェーバー「倫理」論文を読み解く』教文館
- 小林純 2015 『マックス・ヴェーバー講義』唯学書房
- 小林純 2017 『続ヴェーバー講義 政治経済篇』唯学書房
- 佐藤俊樹 2019a 『社会学と因果分析——ウェーバーの方法論から知の現在へ』岩波書店
- 佐藤俊樹 2019b 『神と天使と人間と——大澤真幸『社会学史』(1)』『UP』No.560.
- 佐藤俊樹 2019c 『神と天使と人間と——大澤真幸『社会学史』(2)』『UP』No.561.
- 田村信一 1996 「近代資本主義論の生成 (一)——ゾンバルト『近代資本主義』(初版1902)の意義について」『北星論集』第33号
- 田村信一 1997 「近代資本主義論の生成 (二)——ゾンバルト『近代資本主義』(初版1902)の意義について」『北星論集』第34号
- 内藤葉子 2019 『ヴェーバーの心情倫理——国家の暴力と抵抗の主体』風行社
- 仲正昌樹 2014 『マックス・ウェーバーを読む』講談社
- 野崎敏郎 2016 『ヴェーバー『職業としての学問』の研究 (完全版)』晃洋書房
- 橋本努 2019 『解説 ウェーバー『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』』講談社
- 牧野雅彦 2011 『新書で名著をモノにする『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』』光文社
- 三笥利幸 2008 「日本における『倫理』受容についての一考察」橋本努・矢野善郎編『日本マックス・ウェーバー論争——「プロ倫」読解の現在』ナカニシヤ出版
- 三笥利幸 2009 「マックス・ヴェーバー」宇都宮京子編『よくわかる社会学 第2版』ミネルヴァ書房
- 三笥利幸 2014 『「価値自由」論の系譜——日本におけるマックス・ヴェーバー受容の一断面』中川書店
- 三笥利幸 2019 「マックス・ヴェーバーにおける「科学的問題」とは」『立命館産業社会論集』第55巻第1号
- 山之内靖 1993 『ニーチェとヴェーバー』未来社
- Fischer, Karl, 1907, Kritische Beiträge zu Professor Max Webers Abhandlung: „Die protestantische Ethik und der Geist des Kapitalismus,“ in:

- Archiv für Sozialwissenschaft und Sozialpolitik*,
Bd.25, Tübingen : J.C.B. Mohr.
- Sombart, Werner, 1902, *Der moderne Kapitalismus*,
1.Aufl., Band 1: *Die Genesis des Kapitalismus*,
Band 2: *Die Theorie der kapitalistischen*
Entwicklung, Leipzig, Duncker & Humblot.
- Sombart, Werner, 1916, *Der moderne Kapitalismus:*
Historisch-systematische Darstellung des
gesamteuropäischen Wirtschaftslebens von seinen
Anfängen bis zur Gegenwart, 2. neugearbeitete
Aufl., Band 1: *Einleitung — Die vorkapitalistische*
Wirtschaft — Die historischen Grundlagen des
modernen Kapitalismus, Band 2: *Das europäische*
Wirtschaftsleben im Zeitalter des Frühkapitalismus,
vornehmlich im 16., 17. und 18. Jahrhundert,
München und Leipzig, Duncker und Humblot.
- Sombart, Werner, 1927, *Der moderne Kapitalismus:*
Historisch-systematische Darstellung des
gesamteuropäischen Wirtschaftslebens von seinen
Anfängen bis zur Gegenwart, Band 3: *Das*
Wirtschaftsleben im Zeitalter des
Hochkapitalismus, 1. Halbband: *Die Grundlagen.*
Der Aufbau, 2. Halbband: *Der Hergang der*
hochkapitalistischen Wirtschaft. Die
Gesamtwirtschaft, München und Leipzig, Duncker
und Humblot.
- Tenbruck, Friedrich, 1975, Das Werk Max Webers,
in: *Kölner Zeitschrift für Soziologie und*
Sozialpsychologie, 27.Jg., 4.Heft. (=1997 住谷一
彦他訳「マックス・ヴェーバーの業績 I」『マッ
クス・ヴェーバーの業績』未来社)
- Weber, Max, 1907, Kritische Bemerkungen zu den
vorstehenden „Kritischen Beiträgen,“ in: *Archiv*
für Sozialwissenschaft und Sozialpolitik, Bd.25,
Tübingen : J.C.B. Mohr.

Max Weber and “Modern Culture” :
The Research Question of His Protestant Ethic Article (1)

MITOMA Toshiyukiⁱ

Abstract : There has been misunderstanding about Max Weber’s article „Die protestantische Ethik und der Geist des Kapitalismus“ since its first edition appeared in *Archiv für Sozialwissenschaft und Sozialpolitik* (1904–5). The misunderstanding is as below. Weber’s article would figure out that the ascetic Protestantismus would make economic development. This is often called Weber-These but Weber never claimed it. This is typical misunderstanding from Karl Fischer. I investigate an argument between Fischer and Weber and point out that Weber denied completely his views as foolish-dogmatic these. This article will continue to the next issue.

Keywords : Weber, protestantismus, capitalism, modern, modern culture, Protestant Ethic article, misunderstanding

i Professor, Faculty of Social Sciences, Ritsumeikan University